



「え？わたし・・・？・・・ナンパしてるの？」

（うそ！男の子？・・・ってかまだ子供よね・・・すごいイケメンだけど・・・❤️それに・・・オチンチン❤️・・・おっきい❤️子供のくせにエクセリオンのより大きいかも）
ルーベルは内心、ドキドキしながら答えた。

「そうそう。お姉さんみたいな極上の美人とお近づきになりたいくて❤️」

「ボクらと遊ぼうよ。絶対に退屈させないからさ❤️」

「ダメよ。わたし、パートナーと待ち合わせ中なの。これから討伐クエストなのよ」

「うわぁ❤️お姉さん、ハンターさんなんだ。どおりで良い身体してると思ったよ」

「ねえいいじゃん❤️パートナーさんが来るまで遊ぼうよ❤️」

「ムッチ❤️ムッチムチイ❤️」不意に金髪のイケメンから尻を鷲掴みにされる。

「お尻、おっきいね❤️デカ尻、ムッチムチで、ぶりんぶりんしてる❤️凄いやボーム」

「え？ちよつと・・・ダメ！・・・あん❤️」

「このお尻・・・❤️絶対、誘ってるでしょ❤️」

「ムッチイ❤️ムッチ❤️」

ボームと呼ばれた黒髪のイケメンも尻を触ってくる。

「このデカ尻、凄いね❤️肉厚すぎて指が、ずぶつと沈んじゃうよ。メルシェ。」

「ん、ダメえ！お尻・・・触らないでえ・・・」

「お姉さん、とってもイイ匂いがするよ❤️」

メルシェと呼ばれた金髪イケメンがルーベルに正面から抱きつくと、両手で巨尻を鷲掴みにし、左右に広げた。その結果、パンティーから「くばぁ♥」とアナルとオマンコが丸見えになった。すると、ボームがゆっくりとオマンコに手を伸ばした。

「こらぁ！ダメよお・・・ダメだってばぁ！」抵抗するルーベル。

「Tバックのパンティーにオマンコがピッチリと張り付いちゃって・・・エロ過ぎ♥これは我慢できねーわメルシェ♥」

「コスコスコスコス♥」パンティーの上からオマンコを撫でるボーム。

「あれえ？もう、オマンコ、ヌルヌルじゃん♥濡れまくってるよ、お姉さん♥」

ボームはそう言うと、Tバックをずらし、中指を突っ込んだ。

「くちゅ♥くちゅ♥くちゅ♥くちゅ♥くちゅ♥にちゅ♥にちゅ♥にちゅ♥」

滑らかに中指を動かし、Gスポットを刺激する。

「ちよっと！ダメえよお・・・こらぁ！・・・おほお♥おほお♥ああん♥あん♥」

美しく長い指の腹でナカを優しく擦られ、ルーベルは下半身をガクガクさせながらオホ声をあげてしまう。

「お姉さん、好きモノだねえ♥むちゃくちゃエロいじゃん♥」

ニヤニヤと笑うメルシェ。

「やっべえ♥指にすっげー吸い付く♥このオマンコやべえ♥」

ボームは自分も屈んで、薬指も挿入すると指2本でマン穴をかき回した。

「グチュグチュグチュ♥ニチュツチュ♥ニチュ♥」

湿り気を帯びたエロい音が響きわたる。

「おほお♥ほお♥うほお♥」

「オホ声上げてヨガってんじゃねーかよ♥このエロ女♥うひひ、たまんねー♥尻穴もベロベロしちゃうぞ♥」

ボームはそう言うと、屈んで尻穴に舌を突っ込んだ。

「うひい♥アナルうめえ♥ベロベロレロレロ♥」アナルのナカをむしゃぶるボーム。

「ひいい♥おっ♥あっ♥ああん♥あっ♥あっ♥やめつてえ♥」

頭の後ろで手を組み、舌を大きく出しながら、尻を突き出した格好で、下半身をガクガクガクと痙攣させて、アへってしまうルーベル。先刻までエロいことを考えていたせいか、歯止めが効かない・・・。

「おらぁ♥イケメンにオマンコと尻穴ほじられてイケ♥イケイケイケ♥」

「わひいん♥わっひいひいひいん♥しゅごおおお〜いん♥」

「ブシュ♥ブシュ♥ブジュル♥ブジュ♥びゅくん♥びゅくん♥」

ボームのアナル舐めと極上の手マンに耐えられず、大声で喘いで大潮吹きを披露してしまうルーベル。ボームが指をオマンコから抜き、メルシェが尻から手を放すと、ルーベルは「あへええ♥」と下品な声をあげ、前のめりに倒れた。

そして尻を高く突き出したまま、ヒクヒクとオマンコを痙攣させてしまう。

「いひひひ。派手にイッたなあ♥オマンコがヒクついて・・・エロお♥」
メルシェがイヤらしく笑う。

(こ、こんな、年下の・・・子供に・・・イカされるなんて・・・♥)

尻を震わせながら、マン汁をオマンコから垂らすルーベル。

「お姉さん、名前は？」

メルシェがルーベルの後ろからデカパイを揉みまくりながら聞いた。

「あはん♥ルーベルよ・・・はあん♥乳首・・・こねくり回されて・・・きもちいい♥」

ルーベルは舌を出し、快感に酔いながら答えた。

「パートナーって、誰が来るの？お姉さんみたいな美人さん？」

「お、男よ・・・最強クラスの魔法剣士よ・・・」

「なんだあ・・・男かよ・・・。女だったら、楽しめたのになあ」残念そうなボーム。

「まだ、そのパートナーさんは来ないんでしょ？ルーベルちゃん、セックスしようよ♥ほら、これ見てよ♥もう、我慢できな〜い♥」

「そうそう、ルーベルちゃんがドエロいからこんなに勃起しちゃった。責任とってよ♥」
そう言うと、ボームとメルシェはルーベルの前に立った。

そこには海パンから大きく飛び出した立派過ぎるデカチンポがそり立っていた。それは血管を浮き出たせ、ビッキビキでガッチガチに勃起している。カリ高で、大きくエラの張った亀頭は見事の一言だった。チンポとはかくあるべし、という感じのイケメンデカチンポだ。

「え？・・・ええ・・・?!・・・子供のくせに・・・スゴお♥！」

「いひひ♥目がハートマークになってるじゃん。チンポ好き過ぎだろルーベルちゃん♥」

「うひい♥我慢できね〜♥早くハメてえ〜♥ほら立って♥キスしようよ♥」

メルシェは後ろから抱きつくと、背伸びをしながら、美しい顔を近づけ、舌を出した。

「ふあい♥」あまりのイケメン顔にノー抵抗で舌を出してキスに応じてしまうルーベル。

「レロレロレロ♥むちゅ♥レロレロレロレロレロレロ♥お♥ぶちゅう〜♥」

(じよ、上手う♥キス、とっても上手う♥この子、ムチャクチャ慣れてるわ♥脳みそ・・・トロけそう♥)

「えへへ♥チンポ入れる前に、もう一回、オマンコ気持ち良くなろうね〜♥」

メルシェはベロチューしながら再度、手マンを食らわせた。

パンティーをずらしオマンコをまさぐる。

「ぬちゅ♥にちゅ♥にちゅにちゅ♥ぬっちゅ♥ぬっちゅ♥」

ソッコーでマン汁を溢れさせるルーベル。すでに中指と薬指の2本を迎え入れていた。

「ああん♥あん♥あん♥あ〜ん♥」

(とっても上手う♥フィンガーテクニク・・・凄いわ♥ヤリチンイケメンくん、キスも手マンもマジで上手うう♥x♥)

キスされながらオマンコもほじられてアへ顔をさらすルーベル。